

原城跡沖「白洲」 正体は藻場

世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の一つ、南島原市の「原城跡」の沖に最干潮時に出現する浅瀬「白洲」が、海藻の一種「紅藻サンゴモ球類(サンゴモ)」が球状に成長して集まり作られた藻場であることを、広島大水産実験所などの研究チームが解明した。

広島大チーム解明

白洲で採集した直径1〜3センチの球状のサンゴモ

(サンゴモ球)は10種に及び、このうち2種を新種として発表した。チーム代表の加藤亜記広島大准教授(藻類学)は「白洲の狭い範囲で10種も見つかったのは予想外だった。白洲が多様なサンゴモ球で構成された藻場だと分かった」と話している。

白洲は原城跡から約200〜300メートル沖合にあり、全長約1キロ、最大幅約150メートル。春から初夏にかけて大潮の干潮時に一部が海面に出現し、船で上陸できなくなる。世界的に珍しい現象とされ、「南有馬町郷土誌」(1969年)などでは、サンゴモの一種「リソサムニウム」が無数

に集まって形成しているとされていた。

サンゴモは体に石灰質を沈着して石のように固くなり、通常は岩に固着する。しかし一部の種は岩に固着せずに、直径1〜8センチ程度の球状に成長し、サンゴモ球となる。

研究チームは2018年から23年にかけて、白洲でサンゴモ球の標本を採集。器官の構造や遺伝子のDNA塩基配列などを調べた結果、少なくとも10種のサンゴモ球を確認した。

このうち7種は新種と

海藻の一種が球状に成長

考えられ、研究が進んだ2種を「Roseolithon littorale」(ロゼオリソン・リトラレ)、「Roseolithon sabulosum」(ロゼオリソン・サブロスム)とそれぞれ命名。昨年11月25日に藻類の国際学術誌「フィコロジー」で発表した。

加藤准教授によると、白洲の調査では、リソサムニウムが属する「イシモ属」のサンゴモは見つからなかった。白洲と同様にサンゴモ球で作られた藻場は、国内の文献などを調べ、対馬、吉岐、五島、青森県、三重県、南西諸島で確認した。ただ、人目につく浅い場所で見られるのは原城跡沖の白洲だけだという。

加藤准教授は「南島原の沖合では、光や海流の条件が、球状のサンゴモが繁茂して集積するのに適しているのではないかと推測。「発表した2種以外の新種も研究を進める」と話している。

(西隆志)



原城跡の沖に出現した白洲 =2024年5月、南島原市



加藤亜記
広島大准教授



新種として発表した2種のサンゴモ球。ロゼオリソン・リトラレ(左)とロゼオリソン・サブロスム(加藤准教授提供)